

第二章 光る源氏の物語 父桐壺帝の崩御

[第一段 十月、桐壺院、重体となる]

院の御悩み(院の体調不良が)、神無月(かむなづき、陰暦十月)になりては、いと重くおはします(とても悪く御成りでした)。世の中に惜しみきこえぬ人なし(世の中に是を残念に思わない者も在りません)。内裏にも(うちにも、帝に於かれましても)、思し嘆きて(父院を心配なさって)行幸あり(ぎやうがうあり、お見舞いにお出掛けなさいました)。弱き御心地にも(院は弱気になられて帝に)、春宮の御事を、返す返す聞こえさせたまひて(くれぐれも宜しくとお頼み申し為されて)、次には大将の御こと、

「はべりつる世に変はらず(私が死んでも、今と変らずに)、大小のことを隔てず(事の大小に関わらず)、何ごとも御後見と思せ(何でも弟君の大将の源氏を相談役とお思いなさい)。齡のほどよりは(歳は若くても)、世をまつりごたむにも(国の政治を執っても)、をさをさ憚りあるまじうなむ(決して誤る事は無いだろうと)、見たまふる(ずっと考えてきました)。かならず世の中たもつべき相ある人なり(君は必ず天下を取るだろうと言う骨相を持った人なのです)。さるによりて(だからこそ)、わづらはしさに(上下を間違ふ事態を恐れて)、親王にもなさず(天皇継承権を与えず)、ただ人にて(ただうどにて、臣籍に降下させて)、朝廷の(おほやけの、今上帝たる其許の)御後見を(おんうしろみを、補佐役を)せさせむと(させようと)、思ひたまへしなり(思い申したからなのです)。その心(この私の思いを)違へさせたまふな(背き為され下さるな)」

と、あはれなる御遺言ども多かりけれど(心を込めた御遺言の数々は多く在ったようですが)、女のまねぶべきことにしあらねば(女が公御度を書き写すのは憚られますので)、この片端だにかたはらいたし(此処まで語ることをさへ気が引けます)。

帝も、いと悲しと思して、さらに違へきこえさすまじきよしを(決して御遺言を違え申しなさない旨を)、返す返す聞こえさせたまふ(何度も院に申し上げなさいます)。御容貌も、いときよらにねびませたまへるを(とても立派に御成りになった帝を)、うれしく頼もしく見たてまつらせたまふ(院は嬉しく頼もしく拝し御覧なさいます)。限りあれば(帝は穢れてはならない決まりなので)、急ぎ帰らせたまふにも(長居出来ずにお帰り遊ばされるにも)、なかなかなること多くなむ(名残惜しさに悩まれました)。

春宮も、一度にと思し召しけれど(帝の行幸に御一緒成され様と為さったが)、ものさわがしきにより(あまり大袈裟になりすぎるので)、日を変へて、渡らせたまへり(お見舞いなさいました)。御年のほどよりは(五歳にしては)、大人びうつくしき御さまにて(大人びた美しいお姿で)、恋しと思ひきこえさせたまひけるつもり(院に御会いしたいと思ひ続けていらしたので)、何心もなくうれしと思し(ただ無心に嬉しいと御思いに成って)、見たてまつりたまふ御けしき(院を拝し御覧になる東宮のご様子は)、いとあはれなり(とても労しいものでした)。

中宮は、涙に沈みたまへるを(遺される東宮が不憫で泣いていらしたのを)、見たてまつらせたまふも(院は拝し御覧になられて)、さまざま御心乱れて思し召さる(さまざまな事を御心配にお思い為さいます)。よろづのことを聞こえ知らせたまへど(院は東宮に色々と話し聞かせお教えなされたが)、いとものはかなき御ほどなれば(物心つかぬお年なのでお分かり無いだろうと)、うしろめたく(先立つのが後ろめたく)悲しと見たてまつらせたまふ(可哀想に思い為さいます)。

大将にも(院は同席した源氏にも)、朝廷に仕うまつりたまふべき御心づかひ、この宮の御後見したまふべきことを、返す返すのたまはす。夜更けてぞ帰らせたまふ(夜更けになって東宮はお帰りに成ります)。残る人なく仕うまつりて(多くの高官が付き従って)ののしるさま(大掛かりな行列を為してお帰りに成る様子は)、行幸に劣るけぢめなし(帝のお見舞いに劣る見分けがつきませんでした)。飽かぬほどにて帰らせたまふを(心残りが在るままに東宮がお帰りに成った事を)、いみじう思し召す(院は無念にお思いでした)。

[第二段 十一月一日、桐壺院、崩御]

大后も(弘徽殿大后も)、参りたまはむとするを(院へお見舞いなさろうとしたが)、中宮のかく添ひおはするに(中宮が寄り添っていらしたのを)、御心置かれて(お気に為されて)、思しやすらふほどに(ためらって居らしたが)、おどろおどろしきさまにもおはしまさで(院は重篤に急変なさる間もなく静かに)、隠れさせたまひぬ(お隠れあそばしました)。

足を空に(俄かの崩御に浮き足立って)、思ひ惑ふ人多かり(嘆き惑う人が多く在りました)。御位(みくらゐ、帝位)を去らせたまふといふばかりにこそあれ(を退かされただけで)、*世のまつりごとをしづめさせたまへることも(実際の政務は)、我が御世の同じことにておはしまいつるを(院が在位中と変わりなく御執りに成っていらして)、帝はいと若うおはします(帝がまだ経験不足という事で)、祖父大臣(おほちおとど、摂政の右大臣が)、いと急に(きふに、とても短気で)さがなくおはして(口喧しくいらしたので)、その御ままになりなむ世を(其の方の治世で)、いかならむと(どうなることかと)、上達部(高官や)、殿上人(上級職の者どもは)、皆思ひ嘆く(みな悲観していた)。 *此処の語りは院政と摂関政治の現況描写、という事に成るらしい。

中宮、大将殿などは、ましてすぐれて(殊に格別の寵愛を院に受けていたので)、ものも思しわかれず(悲しみも一入で)、後々の御わざなど(葬儀後の追善供養を)、孝じ仕うまつりたまふさまも(手厚くなされる御様子も)、そこらの親王たちの御中にすぐれたまへるを(多くの皇子たちの中でも格別に為さいましたのは)、ことわりながら(当然の事とはいえ)、いとあはれに(実に情愛深く)、世人も見たてまつる(世の人々も拝し申し上げました)。

藤の御衣(ふぢのおんぞ、喪服)にやつれたまへるにつけても(を着て質素にされている源氏のお姿が)、限りなくきよらに心苦しげなり(この上なく美しくお劳しい)。去年(こぞ、正妻早世)、今年(ことし、父院崩御)とうち続き、かかることを見たまふに(源氏はこうした不幸に見舞われては)、世もいとあぢきなう思さるれど(世の中が本当に無意味に思われ

て)、かかるついでにも(この際に)、まづ思し立たるることはあれど(出家をとも思い立ちなされたが)、また(一方では)、さまさまの御ほだし多かり(様々に其れを許さないしがらみを多くお持ちなのでした)。

御四十九日(おんなななぬか)までは、女御(院の妃)、御息所(親王の妃)たち、みな、院に集ひたまへりつるを(院で喪に服してお過ごしでしたが)、過ぎぬれば、散り散りにまかでたまふ(其々の実家にお帰りに成ります)。「御四十九日」について注に《下に「師走の二十日なれば」とある。さらに「霜月の一ごころ御国忌なるに」とあるので、桐壺院の崩御は十一月一日である。》とある。

師走(しはす)の二十日(はつか)なれば、おほかたの世の中(世間一般も)とちむる空のけしきにつけても(年が暮れようかという空模様で)、まして晴るる世なき(増して晴れる事の無いこの世の中と御思いに成る)、中宮の御心のうちなり(中宮のお気持ちでした)。

大後の御心も知りたまへれば(中宮は大后が自分を快く思っていない事は勿論ご存知でしたが)、心にまかせたまへらむ世の(その大後の天下となって)、はしたなく住み憂からむを思すよりも(虐げられて住み難くなるという事を御思いに成るよりも)、馴れきこえたまへる年ごろの御ありさまを(院と仲睦まじく過ごした暮らしぶりを)、思ひ出できこえたまはぬ時の間なきに(懐かしむ事がもう出来ずに)、かくてもおはしますまじう(このように院に居られずに)、みな他々(ほかほか)へと出でたまふほどに(皆が去って行く事が)、悲しきこと限りなし(悲しくて堪りませんでした)。

宮は、三条の宮に渡りたまふ(中宮は三条の宮邸にお移りになります)。御迎へに兵部卿宮参りたまへり。雪うち散り、風はげしうて、院の内、やうやう人目かれゆきて、しめやかなるに、大将殿、こなたに参りたまひて、古き御物語聞こえたまふ。

御前の五葉の雪にしをれて(院の御所の庭先の五葉の松が雪を被って萎れて)、下葉枯れたるを見たまひて(下葉の赤枯れを御覧になって)、親王(みこ、兵部卿宮はこうお詠みになった。)、

「蔭ひろみ頼みし松や枯れにけむ、下葉散りゆく年の暮かな」(和歌 10-11)

「雪曇りせめて軒下宿りにと、誰も散りゆく暮れの忙しさ」(意識 10-11)

*注に《兵部卿宮の歌。「松」に桐壺院を、「下葉」に後宮の女性たちを喩える。》とある。訳文は「木蔭が広いので頼りにしていた松の木は枯れてしまったのだろうか、下葉が散り行く今年の暮ですね」とある。

何ばかりのことにもあらぬに(特に如何という事もない情景通りの歌だが)、折から(年の暮れに気持ちの暮れるのが重なって)、ものあはれにて(感慨深く)、大将の御袖、いたう濡れぬ(源氏は袖を随分濡らしてお泣きになりました)。池の隙なう氷れるに(そして池に氷が張り詰めているのを御覧になって)、

「さえわたる池の鏡のさやけきに、見なれし影を見ぬぞ悲しき」(和歌 10-12)

「張り詰めた氷の池の鏡面が、映し出すのは曇り空だけ」(意識 10-12)

と、思すままに(思ったままに詠んだ源氏の歌は)、あまり若々しうぞあるや(余りにも子供っぽかったでしょうか)。王命婦、

「年暮れて岩井の水もこほりとち、見し人影のあせもゆくかな」(和歌 10-13)

「年の瀬に冬枯れて閉じる岩清水、一人二人と汲む人も絶え」(意識 10-13)

そのついでに(その他にも)、いと多かれど(女房たちの詠んだ歌は多く在りましたが)、さのみ書き続くべきことかは(そればかり書き連ねますのも如何かと、此処までに致しません)。

渡らせたまふ儀式(中宮が宿下がりなさる行列は)、変はらねど(院の在らせられた時と変らず大掛かりでしたが)、思ひなしにあはれにて(やはり沈みがちで)、旧き宮は(実家の宮邸は)、かへりて旅心地したまふにも(懐かしさよりも旅先のような余所余所しさを感じて)、御里住み絶えたる年月のほど(里帰りなさらず院と幸せに過ぎし為された年月の長さを)、思しめぐらさるべし(改めて気付かされて御出でのようでした)。

[第三段 諒闇の新年となる]

*年かへりぬれど(新年を迎えても)、世の中今めかしきことなく静かなり(世の中は華やかな事が無く静かでした)。 *「諒闇の新年。源氏二十四歳。」とある。「諒闇(りやうあん)」は≪天皇が、その父母の死にあたり喪に服する期間。また、天皇・太皇太后・皇太后の死にあたり喪に服する期間。ろうあん。(大辞泉)≫とある。

まして大将殿は、もの憂くて籠もりあたまへり。*除目(ぢもく、地方官任命式)のころなど、院の御時(おんとき、帝で在らせられた時)をばさらにもいはず(は勿論の事)、年ごろ劣るけぢめなくて(退位された後のこの数年来も寂れる事無く)、御門のわたり(邸の門の前に)、所なく立ち込みたりし(所狭しと立ち並んで挨拶に来ていた地方官たちの)馬、車うすらぎて(馬や車が今年めつきり少なくなつて)、*宿直物の袋(泊り込みのための夜具類一式を入れた担ぎ袋は)をさをさ見えず(さっぱり見えず)、親しき家司(けいし、賄い役の番頭)どもばかり(たちだけが)、ことに急ぐことなげにてあるを見たまふにも(特に宴席の準備をする様子も無しにいるのを目にされて)、「今よりは、かくこそは(今後はこうなるのか)」と思ひやられて、ものすさまじくなむ(物寂しくお思いでした)。 *「除目」は≪平安時代以降、大臣以外の諸官職を任命する朝廷の儀式。地方官を任命する春の県召(あがためし)の除目、京官を任命する秋の司召(つかさめし)の除目のほか、臨時の除目もあった。除書。(大辞泉)≫とあるので此処では「春の県召」の事で、人事に影響力が在った源氏の許に多くの地方官が挨拶参りに訪れた、と言う所なのだろう。*「宿直」は二条院に大勢来る来客の接待の為に使用人もまた大勢泊り込みで対応した、のだろう。泊まって行く来客が在った記述も以前に有った。

御匣殿は(みくしげどの、後宮事務長官だった右大臣家の六の姫君は)、二月に(如月きさらぎに)、尚侍(ないしのかみ、帝の秘書長官)になりたまひぬ(に御就きに成りました)。院の御思ひにやがて(院崩御の服喪として)*尼になりたまへる(仏門入り為された前任者の)、替はりなりけり(替わりでした)。 *注に《故桐壺院の御喪に服して尚侍が出家し、定員二名のうち、一名が空いたので、その後任としての意。》とある。

やむごとなくもてなし(摂関家の姫なので女房たちはとても敬って接し)、人がらもいとよくおはすれば(姫自身のお人当たりも良かったので)、あまた参り集りたまふなかにも(多くの貴女が参り集う後宮の中でも)、すぐれて時めきたまふ(特に時流に乗って目立って御出ででした)。

后は(母后は)、里がちにおはしまして(里の右大臣邸にいらっしゃりがちで)、参りたまふ時の(参内なさる時の)御局(みつぼね、お部屋)には*梅壺(うめつぼ)をしたれば(をお使いになったので)、弘徽殿(こうきでん、後宮第一妃室)には尚侍の君(かんのきみ)住みたまふ。 *「梅壺」は<南面の壺庭に紅梅・白梅が植えてあったところから凝花舎(ぎょうかしゃ)の異称。(大辞泉)>とある。「凝華舎」は後宮西側の殿舎で飛香舎の藤壺の北隣に位置し、<母屋の大きさは飛香舎と同じ。四面に廂、東に孫廂がある。(Yahoo 百科)>という。母后が主妃室の弘徽殿を引き払って後宮五舎の梅壺を使ったのは、五舎が七殿より帝からの独立性が幾分高く、<またそこに摂政(せつしょう)・関白の直廬(じきろ、控室)が置かれたため、叙位・除目(じもく)なども行われた。(同左)>からではないだろうか。

登花殿(とうかでん、弘徽殿の北隣の間)の埋れたりつるに(が使われずに来て静まり返っていたのが)、晴れ晴れしうなりて(尚侍の君は役目柄多くの女官を従がえていたので其処も晴れて使ったので)、女房なども数知らず集ひ参りて、今めかしう花やぎたまへど(今を盛りと華やいで居らしたが)、御心のうちは(尚侍の君は内心では)、思ひのほかなりし(思いがけなかった源氏との色恋事のことどもを(数々を)忘れがたく嘆きたまふ(忘れ難く嘆いて御出ででした)。

いと忍びて通はしたまふことは(ごく内密にお手紙を交して居らした事は)、なほ同じさまなるべし(以前と変りなかったのでしょうか)。「ものの聞こえもあらばいかならむ(手紙の遣り取りが右大臣家に知れたら徒では濟まないだろう)」と思しながら(と御思いに成りながら)、例の御癖なれば(源氏は難癖の有りそうな事を刺激に御思いに為る御性分なので)、今しも御心ざしまさるべかめり(今更になって却って六の姫に興味をお持ちに為っていらっしゃるようです)。

院のおはしましつる世こそ憚りたまひつれ(院のご存命中こそ遠慮して居らしたが)、后の御心いはやくて(母后のご気性はとても激しくて)、かたがた思しつめたることどもの報いせむ(源氏には色々募る恨みを晴らそう)、と思すべかめり(とお思いだったようです)。ことにふれて(事務連絡を態と知らせずに)、はしたなきことのみ出で来れば(恥を掻かせる様な嫌がらせばかりされるようになると)、かかるべきこととは思ししかど(母后の差し金と察しながら)、見知りたまはぬ世の憂さに(今まで受けたことも無い世間の冷たさに)、立ち舞ふべくも思されず(源氏は進んで立ち回る意欲を失くして御出ででした)。

左の大殿も(ひだりのおほいどのも、左大臣も)、すさまじき心地したまひて(帝の名の下で行われる右大臣の専制に虐げられる気持ちに成られて)、ことに内裏にも参りたまはず(普段の出勤も為さいません)。故姫君を、引きよきて(今上帝が東宮の時に妃に求めたのを引き離して)、この大将の君に聞こえつけたまひし御心を(源氏に添わせた左大臣の御気持ちを)、後は思しおきて(母后は根に御持ちになって)、よろしうも思ひきこえたまはず(嫌って御出でのようでした)。

大臣の御仲も(左大臣は右大臣との御仲も)、もとよりそばそばしうおはするに(元々刺々しくしていらして)、故院の御世にはわがままにおはせしを(故院の存命中は我が儘に振舞ってもいらしたので)、時移りて(立場が変わって)、したり顔におはするを(右大臣が得意顔をしていらっしゃるのを)、あぢきなしと思したる(耐え難く御思いに為るのは)、ことわりなり(当然でした)。

大将は、ありしに変わらず(故姫の存命中と変わる事無く)渡り通ひたまひて(左大臣家をお訪ねになって)、さぶらひし人々をも(若君のお世話に居残った女房たちのことをも)、なかなかこまかに思しおきて(却って細々と気配りなさって)、若君をかしづき思ひきこえたまへること(若君を大事に思って御育てなさる事)、限りなければ(この上なかったのも)、あはれにありがたき御心と(情け深く有難い源氏のお気持ちと左大臣は感じ入り為されて)、いとどいたつききこえたまふことども(ますます丁重に源氏のお世話をなさるのも)、同じさまなり(以前と同じでした)。

限りなき御おぼえの(故院の格別のご寵愛を受けて)、あまりもの騒がしきまで(過分なほどに褒め称えられて)、暇なげに見えたまひしを(引きも切らず女遊びに明け暮れていた源氏でしたが)、通ひたまひし所々も(近頃は通い先の女たちとも)、かたがたに絶えたまふことどもあり(お互いに手紙も交さなくなった者もいて)、軽々しき御忍びありきも(軽々しい遊び通いも)、あいなう思しなりて(詰まらなく御思いになって)、ことにしたまはねば(特に為さらないので)、いとどのどやかに(とても穏やかな)、今しもあらまほしき御ありさまなり(今更ながら在るべき良人の姿なのでした)。

西の対の姫君の御幸ひを(おんさいはひを、正式の御成婚を)、世人も(よひとも、世間の人々も)めできこゆ(お祝い申し上げます)。少納言なども、人知れず、「故尼上の御祈りのしるし」と見たてまつる(と思い申し上げます)。父親王も(ちちみこ、姫君の実父たる兵部卿宮も)思ふさまに(姫君と親しく)聞こえ交はしたまふ(手紙を交しなさいます)。嫡腹の(むかひばら、兵部卿宮の正妻が生んだ子供たちで)、限りなくと思すは(栄達の希みを掛けて居た者の中には)、はかばかしうもえあらぬに(出世や良縁に恵まれた者もいなかったのも)、ねたげなること多くて(対の姫が帝の実弟である大将の君と結ばれた事を妬む気持ちが強くて)、継母の(ままはは、姫の義理の母に当たる)北の方は、やすからず思すべし(心穏やかでは無かった事でしょう)。*物語にことさらに作り出でたるやうなる御ありさまなり(まるで昔話に在るような継子だけが良縁に恵まれる有様で御座いました)。*注釈に《『評釈』は「継子が幸せになる話は、昔物語の『住吉物語』や『落窪物語』など現存するのにも見られるが、

今の有様はちょうどそれと同じだという。このお話はそういう昔物語ではない。実際あった話なのだ、作者は、そうことわるのである」という。》とある。

齋院は(帝の実の妹であった賀茂社の齋院は)、御服にて(おんぶくにて、実父たる院の喪に服して)下りゐたまひにしかば(退下なされたので)、朝顔の姫君は(故院の弟宮にあたる式部卿宮の朝顔姫が)、替はりにゐたまひにき(替わりに其の任に御就きになりました)。賀茂のいつきには、*孫王(そんわう、帝の男系血筋から見て孫に当たる齋王)のゐたまふ例(が就任なさる例は)、多くもあらざりけれど(帝の皇女や姉妹に当たる内親王が就任なさるのに比べて多くは無かったが)、さるべき(今は然るべき)女御子や(をんなみこ、内親王が)おはせざりけむ(いらっしゃらなかったのです)。*直系尊属で見ると、帝の娘が一親等、帝の父の娘が二親等、帝の祖父の娘が三親等となって、娘や姉妹に候補が居ないので三親等内でト上されたという事らしい。

大将の君、年月経れど(としつきふれど、何年経っても)、なほ御心離れたまはざりつるを(なお朝顔の姫君に御執心なさって居らしたが)、かう筋ことになりたまひぬれば(このように姫が神に仕える身に御成りに為られて恋人には成し得なく為られたのを)、口惜しくと思す(残念な事と御思いに為ります)。中将に(ちゅうじゃうに、源氏は姫の女房である中女将に)おとづれたまふことも(姫の様子を訪ねる事も)、同じことにて(以前と同じで)、御文などは絶えざるべし(手紙などは絶えずに居たのでしょう)。昔に変はる御ありさまなどをば(院亡き後の公の立場の変化などには)、ことに何とも思したらず(特に不遇をお気に為さる事も無く)、かやうのはかなしごとどもを(こうした恋心の移ろいに)、紛るることなきままに(身を糺して)、こなたかなたと(齋院や尚侍の事を)思し悩めり(思い悩んで御出ででした)。

[第四段 源氏朧月夜と逢瀬を重ねる]

帝は、院の御遺言違へず、あはれに思したれど(院の御遺言どおりに源氏を親しく御思いに為って補佐役に就かせようと御考えに為ったが)、若うおはしますうちにも、御心なよびたるかたに過ぎて(お若い上に優柔不断でいらして)、強きところ(毅然とした所が)おはしますまぬなるべし(御在りでは無かったのでしょう)、

母后(ははぎさき)、祖父大臣(おほちおとど、母方の祖父である右大臣が)とりどりしたまふことは(取り仕切る諸々の事には)、え背かせたまはず(とても反対なさる事が御出来になれず)、世のまつりごと、御心にかなはぬやうなり(天下の政治向きも思うようには御諮りに為れない御様子でした)。

わづらはしさのみまされど(右大臣家が源氏を排除しようとする源氏の素行監視を厳しくしていたが、六の姫たる)、尚侍の君(ないしのかみのきみ=かんのきみ)は、人知れぬ御心し通へば(密かに源氏と手紙は交していたので)、わりなくてと(都合は悪かったが)、おぼつかなくはあらず(相手の様子が分からない事はありませんでした)。

*五壇の御修法(ごだんのみしゅほふ、宮中で行われた国事法要)の初めにて(の初日に於いて)、慎しみおはします隙をうかがひて(帝が謹慎なさって内侍所の御用が無い隙を窺って)、例の(源氏はまたも)、夢のやうに聞こえたまふ(まさかの逢瀬を女房に取り次がせなさいます)。*注に《五大尊(不動明王・降三世明王・大威徳明王・軍荼利夜叉王・金剛夜叉王)を安置する壇を設けて行う修法。天皇や国家に重大事のある時に行う。ここでの重大事が何であるかは不明。》とある。

かの(そこで)、昔おぼえたる細殿の局に、中納言の君(尚侍の女房は源氏を手引きして)、紛らはして入れたてまつる。人目もしげきころなれば(催事で人の出入りが多い時なので人目が多く)、常よりも(普段に男女の逢瀬で使う母屋よりも)端近(はしちか、廊下に面した)なる(局での密会だったので)、そら恐ろしうおぼゆ(女房は事の露見を恐れました)。

朝夕に見たてまつる人だに(毎日と源氏に拝し奉る女房でさえ)、飽かぬ御さまなれば(胸ときめく御容貌なので)、まして、めづらしきほどにのみある御対面の(ごく偶にしか会えない尚侍にしてみれば)、いかでかはおろかならむ(どれほど嬉しかった事でしょう)。女の御さまも、げにぞめでたき御盛りなる。重りかなるかたは(公私の重々しさという点では)、いかがあらむ(如何かと思われたが)、をかしうなまめき若びたる心地して(美しく艶めいて若々しい感じで)、見まほしき御けはひなり(とても魅力的でした)。

ほどなく明け行くにや、とおぼゆるに(と思われる頃に)、ただここにしも(直ぐ側の細殿脇の庭先で)、「*宿直申し、さぶらふ(夜回りで御座います)」と、声づくるなり(右近の当番が見回りの声を立てました)。*宿直申し(とのいもうし)については《宿直奏の上司に姓名を申告する言葉。宮中の夜間の警備は、戌、亥、子までを左近衛府、丑、寅、卯までを右近衛府が担当する。ここは夜明け間近であるから、右近衛府の官人。源氏は右大将。》と注にある。しかし、密会の場へ挨拶回りに来るのは冷かさに他ならない。源氏の密会を知る近衛はいないだろうし、仮に知ったとしても大将を冷かせる筈も無い。従って当夜はこの夜回りの同僚が弘徽殿仕えの女房の許へ忍び込んでいるのを冷かした事になる、という事らしい。

「また(誰か)、このわたりに隠ろへたる近衛司(このゑづかさ、部下の高官)ぞあるべき(でも居るのだろう)。腹ぎたなき(意地の悪い)かたへの(高官の同僚上司が夜回り番に)教へおこするぞかし(教えて挨拶に遣したに違い無い)」と、大将は聞きたまふ(大将は其の声をお聞きになります)。をかしきものから(雲上人同士の夜遊びをからかう可笑しさを感じながらも)、わづらはし(源氏にはとぼっちりで急き立てられる煩わしさも在りました)。

ここかしこ尋ねありきて(夜回りは辺りを此処彼処と歩きながら)、「*寅一つ(とらひとつ、午前四時)」と申すなり(と触れて行きました)。*注に《宿直奏の声。寅の刻を午前四時から六時までとすれば、寅の一刻は四時から四時半まで。》とある。寅二つ(とらふたつ)は四時半から五時。寅三つ(とらみつ)は五時から五時半。寅四つ(とらよつ)は五時半から六時。

女君、

「心からかたがた袖を濡らすかな、明くと教ふる声につけても」(和歌 10-14)

「あれこれ思う別れの辛さ、時を急かせる声を聞くほど」(意識 10-14)

とのたまふさま、はかなだちて(はかなさが際立って)、いとをかし(情に訴えます)。

「嘆きつつわが世はかくて過ぐせとや、胸のあくべき時ぞともなく」(和歌 10-15)

「このまま此処に留まって、泣かずに済むならそうしたい」(意識 10-15)

静心なくて(源氏はそう返歌すると気忙しく)、出でたまひぬ(局をお出になりました)。

夜深き暁月夜の(よぶかきあかつきづきよの)、えもいはず霧りわたれるに、いといたうやつれて(ごく簡素な服装で)、振る舞ひなしたまへるしも(細殿から庭先へ抜け出てお帰りになる源氏の立ち居振る舞いも)、似るものなき御ありさまにて(この上なく情緒深いお姿でしたが)、*承香殿の(しょうきやうでん、帝の第一妃の)御兄の(おんせのと、兄君である)*藤少将(とうせうしやう)、*藤壺より出でて(細殿の向かいの飛香舎から出て来ていて)、月の少し隈ある(月光が少し陰に成っている)立蔀(たてじとみ、軒先の蔀戸)のもとに(の外の簀子に)立てりけるを(立っていたのを)、知らで過ぎたまひけむこそ(知らずに前を通り過ぎなさった事こそ)いとほしけれ(間の悪い事でした)。 *承香殿は《平安宮内裏(だいら)の殿舎の名。内裏中央仁寿殿(じじゅうでん)の北にある。(Yahoo 百科)》とある。母屋には女御が住まったらしいが、最も表向きに近い後宮舎殿である。故に第一妃を示す。 *藤少将は藤原家筋の近衛少将だろうから、宿直が冷かしたのはこの御仁かとも思えるが、特には記述も無い。 *藤壺は桐壺院の在位中に中宮が住いとしていた飛香舎。この殿舎仕えの女房の局に藤少将が忍び込んでいた、という事なのだろう。ただし、この時の藤壺に何と言う女御が住まっていたかは不明、と注にあった。

もどききこゆる(藤少将から右大臣家に話が漏れて非難される)やうもありなむかし(よ
うな事になるのかもしれない)。

かやうのことにつけても(このように源氏は右大臣家の六の姫と密会を果たしたにも関わらず)、もて離れつれなき人の御心を(相変わらず寄せ付けないままの中宮のお気持ちを)、かつはめでたしと思ひきこえたまふものから(一方では立場を弁えたものと敬い申し上げつつも)、わが心の引くかたにては(自分の恋慕からすれば)、なほつらう心憂し(やはり辛く寂しい)、とおぼえたまふ折多かり(とお思いになる事が多かったのです)。